

婚約破棄令嬢の華麗なる転身

## 登場人物紹介

### 国王

ガルディーン王国国王。  
フィリップの父。

### フィリップ

ガルディーン王国第二王子。  
二十歳。アイリスと婚約  
していたが……

### シュトレーン侯爵

厳しく気難しいアイリスの父。

### マリーベル

アイリスの従姉妹。  
明るく気さくな姉貴肌。  
伯爵夫人。

### コナー

エヴァンの従者。

### アイリス・シュトレーン

名門シュトレーン侯爵家の令嬢。  
十八歳。第二王子の婚約者として  
厳しく躱げられる。緩やかな金髪と  
青い瞳を持つ。しとやかながら  
凛とした強さのある少女。

### エヴァン・レイニー

潤沢な資金を持つ謎の商人。  
癖の強い黒髪と紫色の瞳をした  
エキゾチックな美丈夫。  
アイリスの事情を知り、  
援助を申し出るが……

## 第一章 まさかの婚約破棄

「——今、なんとおっしゃったのですか、国王陛下下？」

自分の隣で絶句している父に代わり、シュートレーン侯爵家の一人娘、アイリスは震える声で問いかけた。

淡く輝く柔らかな金髪に縁取られた面立ちは、楚楚とした美しさに満ちている。深い海の色を写し取ったような大きな青い瞳は特に印象的だ。

だが、アイリスはその瞳を大きく見開き、いつもは薔薇色に輝く頬を真っ青にしている。

季節は初春。寒さがなりを潜め、春の花がほころび始める季節だが——彼女たちがいるガルディーン王国、国王陛下の謁見室には、真冬の湖より凍てついた空気が流れていた。

動揺を抑えきれないアイリスの問いかけに対し、布張りの玉座に座る国王は、気まずそうに視線を逸らす。

だが、ほどなくしてぞんざいな口調で問いに答えた。

「第二王子フィリップと、そなた……シュートレーン侯爵令嬢アイリスとの婚約を、破棄すると言ったのだ」

破棄したい、ではなく、破棄する——

すでに決定事項として伝えられた内容に、アイリスは目の前が真っ暗になったように感じた。(なぜ。いったいどうして……)

——アイリスが生まれたシュトレン侯爵家は、ガルディーン王国において宰相などの要職を歴任してきた名門貴族だ。それもあって、アイリスは物心つく前に、この国の第二王子フィリップの婚約者と定められた。

それ以降、王子の婚約者にふさわしくあれと厳しく教育されてきた。

晴れて十八歳を迎え、本格的に結婚の準備を始めていた、その矢先のことである。

……とてもではないが「はい、そうですか」とすんなり認められる心境ではなかった。

「……恐れながら陛下、婚約破棄となった理由をお聞かせ願えませんか？ フィリップ殿下の婚約者として、なにかわたしに至らぬところがあつたのでしょうか？」

勉強も礼儀作法も人一倍頑張ってきたつもりだが、自分でも気づかぬうちに、フィリップ殿下や陛下の逆鱗げきりんにふれることをしてしまったのだろうか？

さらに顔色を青くさせるアイリスに、国王はきっぱり断言した。

「いいや。そなたに問題はない」

アイリスはほっとするが、同時に戸惑いが大きくなる。

視線でそれを訴えると、国王は深くため息をついた。

「……当事者であるそなたには、話さぬわけにはいかぬな。だが、これは王族の威信にかかわる

ことゆえ、他言無用とするように」

王族の威信にかかわる……アイリスも同席する両親も、ゴクリと唾を呑み込んだ。

玉座に背を預けた国王は、アイリスたちを見下ろしゆっくりと口を開く。

「そなたらも、フィリップが隣国ルピオンに留学していたのは知っておるな？」

「は、はい……芸術分野の見聞を広めるためと。留学からお戻りになり次第、挙式と伺っておりましたので、こちらでも準備を進めていた最中でした」

ようやく衝撃から立ち直ったらしく、アイリスの父シュトレン侯爵が頷いた。

「その留学先で、あろうことかフィリップは、現地の女優に熱を上げ——その女と結婚すると連れて帰ってきおつたのだ！」

唾棄だきするような国王の言葉もきることながら、伝えられた内容にアイリスも両親も大きく目を瞠みはった。

「流行りの小説でもあるまいし、王子と女優の結婚など許すはずがない。本来なら叩き出してやるところだが——問題は、その女優がフィリップの子を身ごもっているということだ！」

国王の言葉に、アイリスの母はひっと喉を鳴らして気を失ってしまった。

できることならアイリスも気絶してしまいたかったが、椅子の肘掛けを握ってかろうじて耐える。国王の話では、どうやら現在、その女優は国王直属の近衛兵監視の下、離宮に留め置かれているらしい。たとえ認められなくても、相手が王子の子を身ごもっているとすれば、下手へたに追出すわけにはいかないのだろう。

そして肝心のフィリップは、王城の自室で謹慎中とのことだった。この場に出てこれられないのも、外部との接触を禁じられているからだという。

「再度言うが、このことはこの場にいる者だけの秘密だ。王子が隣国で女優を孕ませたなど、外聞が悪すぎる。知られれば王家の権威が失墜しかねない」

それは確かにそうだろう。しかし……

(それだと、わたしが理由もなく、ただ一方的に婚約を破棄されたことになってしまう……)

貴族の娘にとって、結婚は人生における重大事だ。

娘本人と言うより、その生家にとって重要な意味を持つ。娘を少しでもいい家に嫁がせることができるれば、姻戚によつて家格を上げることができるからだ。

だからこそ貴族の娘は、幼い頃より貴婦人教育を施され、夫に忠実で貞淑な妻になることを求められるのだ。

それが、結婚間近に王家から婚約破棄を申し渡されたとなれば……世間はアイリスをどう見るだろう。なにか殿下や陛下の気に障ることをしたのだと疑われることは、きつと免れない。

(そんなことになったら、わたしには次の嫁ぎ先など見つからなくなる……)

アイリスはとつさに、父に助けを求める視線を送っていた。

父はアイリスの視線に気づくことはなかったものの、なんとかして陛下のお考えを変えようと身乗り出して懇願する。

「し、しかし、陛下もその女優を歓迎しているわけではないのでしょうか？ ならば、予定通りアイ

リスと結婚し、生まれた子供を二人の子として引き取ってはいかがでしょうか？ 女優は殿下の愛人ということにすれば……」

父の提案に、アイリスは思わず息を呑む。確かにそれなら、アイリスは婚約破棄の憂き目を見ることはなくなるだろう。

その代わり、夫に愛人がいることに目をつむって生活することになる。おまけに二人の子供を自分の子として育てるなんて……

だが、それに対する心配は杞憂だった。国王が重苦しいため息をつき、首を横に振ったからだ。

「余も同じことを提案してみたが、フィリップが頑として受け入れぬのだ。自分は女優を一途に愛している。その愛を裏切るような真似はできぬと抜かしてな。まったく……」

国王もそうとう参っているのだろう。片手に顔を埋めて肩を落とす様は、一国の王とは思えぬほど小さく見える。

しかし、アイリスと父侯爵に比べればまだマシなほうだ。最後の望みも絶たれて、二人は文字通り絶句したまま凍りついてしまった。

「侯爵家には後日、慰謝料を送る。すまぬが、それで此度の話はなかったことにしてくれ。——もう下がってよい」

国王陛下の言葉に、父はぎこちなく立ち上がってお辞儀する。つまり父は、国王陛下の決定をそのまま受け入れるということだ。

(嘘でしょう……?)

9 婚約破棄令嬢の華麗なる転身

呆然としたまま頭を下げるアイリスは、足下が崩れ落ちるような絶望に落とされる。あまりのことに口も利けないまま、侯爵家の三人は王城をあとにするのだった。

侯爵家へ帰宅し、意識が朦朧としたままの母が使用人によって運ばれる中、アイリスは父に呼びつけられて書斎へ入る。

王城では極力感情を表に出さなかった父だが、さすがに家ではそうはいかないらしい。

「なんということだ。よりによつて婚約破棄とは……！ アイリス！ おまえがフィリップ殿下を虜にできていなかったから、殿下は女優ごときになびいてしまったのだぞ!?」

文机を拳でドンツと叩いて、父が血走った目で怒鳴ってくる。

激昂する父から投げつけられた言葉に、アイリスは息を呑んだ。

（そ、そんな……。婚約破棄はわたしのせいだとおっしゃるの?）

思いもよらない言葉に、ショックで足下がふらついてしまう。

——確かにフィリップは、こちらが手紙を出してもほとんど返事をくれなかったし、贈り物をくれることもなかった。婚約者として一緒に舞踏会へ参加しても、最初のダンスを踊ったあとは気の合う友人たちと楽しむばかりで、アイリスはずっと放っておかれていたのだ。

それを寂しく思わなかったと言えは嘘になる。だが未来の王子妃として、夫となる方に忠実で貞淑な振る舞いを求められてきたアイリスは、フィリップにそれを伝えることができなかった。

それでも彼は、夫婦として長い人生をともにする相手だ。だからこそアイリスは、これからじつ

くりと関係を深めていって、二人なりの幸せを築いていけたらいいと考えていた。

——けれどフィリップは、アイリスに対してそう思わなかったらしい。

唇を震わせ立ち尽くすアイリスに、父は厳しく言い渡した。

「おまえはしばらく自室で謹慎している。しばらくその顔をわたしに見せるな。忌々しい」

——このシュトレーン侯爵家で、父の言葉は絶対だ。アイリスはぎゅっと目をつむり、ぎこちなく一礼する。

「まったく、役に立たない娘だ」

書斎を出る際、父の吐き捨てた一言が、いつまでもアイリスの耳にこびりついて離れなかった。

\* \* \*

それからしばらくして、王家から正式に二人の婚約破棄が公表された。

表向きは『王子側の都合により』とされたが、それ以上の理由が公にされなかったため、アイリスの懸念通り、様々な憶測を呼ぶことになった。

さらには、フィリップが従者へ「アイリスは中身のないお人形のように、一緒にいてもなんの面白味もなかった」と不満をこぼしていたことが広まると、事態は悪化の一途をたどる。

——確かに、アイリス・シュトレーンは花のような美しさを持つ淑女だった。しかし貴婦人として模範的すぎて、一緒にいると息が詰まる。

——新しい物好きで奔放なフィリップ殿下にとつては、かなり息苦しい相手だったのだろう。などと、周囲はさも婚約破棄の理由がアイリスにあったかのように、フィリップに同情しているという。

久々に顔を合わせた父からそう聞かされたアイリスは、驚きと衝撃のあまりしばらく口を利くことができなかった。

「噂好きの輩から散々質問攻めにされた。婚約破棄だけでも家の恥だというのに、さらに面白おかしく噂されるなど……」

「面白おかしく……噂……?」

父の口調から、それが決していい内容ではないと察し、アイリスはこわごわと尋ねてみた。

親戚の付き合いで夜会に出席していた父は、怒りをぶちまけるように帽子を床に叩きつける。

「婚約破棄の原因は、おまえにあるのではないかという話だ……! 王家が婚約を破棄せざるを得ない事情——子を孕みにくい体質であるとか、すでに純潔を失っているのではないか、と噂されていると、懇切丁寧に教えられたんだぞ!」

あまりにひどい憶測に、アイリスは真っ青になってよろめく。

「どうして……」

「王家の簡潔な公表は、フィリップ殿下があえて泥を被ることで、おまえの名誉を守ろうとしたのではないかと思われるそうだ。お優しい殿下が婚約破棄のせいで謹慎されていることに、多くの人間が心を痛めておる」

「そ、んな……」

なんとも皮肉な話だ。婚約者がいながら留学中に女優を孕ませたフィリップのほうが、世間から同情されているなんて。

「それだけ周囲がおまえに悪感情を持っていたということだ。そうでなければ我が侯爵家の一人娘が、そのような悪評を被るはずがない! おまえ、よもや噂されている通り、すでに純潔を失っているのではあるまいな!」

父にギロリと睨みつけられ、アイリスは氷水を浴びたように背筋をゾッと凍らせた。

「お父様、なにをおっしゃるのです!? 神に誓って、そのようなことはありません!」

まさか実の父にまで不貞を疑われるなんて思ってもみなくて、アイリスは必死に首を横に振る。

「これまでフィリップ殿下の婚約者として、恥ずかしくない生活をしてきました。それはお父様もご存じのはずです。どうしてそんなことを……!」

「知ったことか! 女が言うことなどそもそも信用できません。そうでなければ、このような噂が立つはずがないだろう!」

近くの戸棚をドンッと叩いて、父は口角泡を飛ばして怒鳴ってくる。

父の言葉に、全身が震えるのを止めることができない。アイリスは国王陛下から婚約破棄を告げられたとき以上のショックを受けて、その場にへたり込みそうになった。近くにあった長椅子の背に手をつき、どうにか身体を支える。

(お父様はもう、わたしの言葉を信じてはくださらないの……?)

きつと父にとつては『娘が王子に婚約破棄された』という事実がすべてで、これまでしてきた努力やアイリス自身のことなど、どうでもいいことなのだ。

父と一緒に部屋に入ってきた母も、アイリスを擁護することなく、ただ沈黙を貫いている。両親にとつて、婚約破棄された自分は今もう、娘としての価値などないのかもしれない。そう思った瞬間、アイリスの胸に深い悲しみが込み上げてきた。

知らず涙が滲んで、頬を濡らしていく。だが声もなく泣く娘の姿すら視界に入れたくないとばかりに、父はさつと背を向けた。

「これほど醜聞にまみれ、この家に泥を塗ったおまえには、もはや求婚する者も、もらい受けてくれる者もないであろうな」

すれ違いざま吐き捨てられた言葉が、アイリスの心をさらに深く傷つけたのだった。

それからのアイリスは、もはや生きていくのか死んでいるのかわからない生活を送った。

父は特に謹慎を続けるとは言わなかったが、どこかに行く気持ちも誰かと話す気力も起きず、じつと自室に引きこもっている……この家で、アイリスは今や完全に腫物扱いになっていた。

専属のメイドたちさえ、食事や入浴のとき以外に寄りつくことはなくなった。一人でいると、気持ちはますます沈み込む一方である。

(まるで世界中が敵に回ったみたいだわ……)

鏡に映った自分のひどい顔を見て、アイリスは力なく笑う。

十八年間、ひたすら家や王家のために努力してきたけれど、その結果がこれほど惨めなことになるうとは……正直、思ってもみなかった。

部屋に引きこもっている間、メイドたちの噂から、状況がどんどん悪くなっていることが窺える。今では貴族だけに留まらず、多くの民が第二王子の婚約破棄について噂して、屋敷の前を新聞記者が陣取っているような有様だ。

周囲に求められるまま、王子妃にふさわしい貴婦人であろうとした。だが婚約破棄となった途端、皆がアイリスを一方的に非難してくる。

非難されるだけの問題がどこかにあったということだろうか？ だとしたら、それはなんだっただろう？ いったい自分のなにがいけなかったのだろうか……？

婚約破棄を言い渡されてから今日まで、何度となく自問してきたが、いまだ明確な答えは出てこない。いつそ世間が言うようにアイリスに問題があったのなら、自業自得だとあきらめもついたのであるか？

(これから、いったいどうすればいいのかしら……)

出口のない迷路をさまよひ、アイリスは一人、部屋でため息を吐いた。

そんなある日――

心配した父方の従姉妹であるマリーベルが、アイリスの見舞いにやってきた。

「お久しぶりね、アイリス。婚約破棄のショックで寝込んでいると聞いていたけど、ひとまずそういうわけではなさそうで安心したわ」



「マリーベル……」

アイリスの自室に入ってきたマリーベルは、きちんとした格好で出迎えたアイリスを見て、ほっとした様子で胸を撫で下ろした。そして以前と変わらぬ親愛のこもった抱擁ほうようをしてくる。

久々に感じるひとのぬくもりに、心身ともに弱っていたアイリスはつい泣きそうになった。「ひどい顔色よ。こんな暗い部屋に閉じこもって、身体によくないわ」

マリーベルはアイリスの頬を両手で包んで、じっと顔をのぞき込んでくる。

アイリスは「ええ、そうね」と微笑んだが、マリーベルはかすかに眉をひそめた。

「……事情はお察しするけど、屋敷のままで暗すぎよ。あなたたちももっと愛想よく笑いなさい」

マリーベルはため息をつき、無表情でお茶を運んできたメイドに文句を言う。

相変わらずの従姉妹いとこの様子に微笑して、アイリスは彼女を長椅子ながいすに促した。

「仕方ないわ。あれからずっとお父様の機嫌が悪いのだもの。笑い声どころか、くしゃみをしただけでも怒られるのよ」

「伯父様も変わらないわね。そういうところがうちの父と合わないのよ、きつと」

マリーベルはやれやれ、とばかりに肩をすくめる。

「ふふっ。マリーベルったら」

従姉妹いとこの大げさな仕草に、アイリスはつくつくすと笑ってしまった。

マリーベルはほっとしたように口元くちもとを和らげる。

「よかった。まだ笑える気力は残っていたわね。そうやってもっと笑ってればいいのよ、アイリ

ス。だってあなたはなにも悪くないんだから。堂々としていたらいいわ」

その言葉に、アイリスは驚いて息を呑んだ。

「マリー……あなたはわたしが悪いとは思わないの？ 世間の噂では、わたしに非があったと言われているのに」

「あいにくとわたしは、あなたと十八年も付き合ってきたのよ？ ひとに言われるまでもなく、あなたがどんな人間かはよく知っているの。真面目すぎるほど真面目なことも、王子妃になるために頑張ってきたことも、すべてね。そんなわたしが、根も葉もない噂うわさごときに惑わされると思っ  
て？」

ふふんと得意げに微笑まれて、アイリスは胸の奥がじわじわと温かくなるのを感じた。本当に久々に感じる喜びの感情に、彼女の口元にも自然と笑みが浮かぶ。

「……ありがとうマリー。本当に、ありがとう……」

「なによ、大げさね。それより聞いてよ。この前うちのひとつたらね……」

マリーベルはさっさと話題を逸よらして、いつも通り自分の夫のことや最新の流行のことなどを話し始める。これまでの鬱々うっとうとした時間を忘れ、アイリスも年頃の女性らしい世間話を楽しんだ。

が、それからしばらくした頃。マリーベルが突如として立ち上がり、寝室に続く扉に歩いて行く。「マリーベル？ どうしたの……」

驚いて声をかけた次の瞬間、マリーベルが開いた扉の向こう側から、二人のメイドが部屋に倒れ込んできた。

「——主人の会話に聞き耳を立てるなんて、恥を知りなさい！ わたしの家のメイドだったら、紹介状を書かずに叩き出してやるところよ！」

慌てて逃げ出すメイドたちにフンツと鼻を鳴らして、マリーベルは憤然と扉を閉めた。

「まったく、侯爵家に仕える者としての誇りはどこへ行ったのかしら!？」

「……もしかしたら、お父様がわたしを見張るように命じたのかもしれないわ。わたしはもう信用されていないから」

ふりふりと怒っているマリーベルに、アイリスが寂しげに言った。

「はあ!? なんてことを言うのアイリス……っ」

いくらなんでも侯爵がそんなことをするわけない、という顔をしていたマリーベルだが、アイリスの神妙な面持ちを見て口をつぐんだ。

そのままなにかを考え込むようにしたあと、「よし決めた」と手を叩く。

「——いいわ。アイリス、あなた、うちにいらっしやい。こんな重苦しい雰囲気の家敷に閉じこもっていても、いいことなんて一つもないもの！」

「え、マリーベルの家?」

突然の提案に、アイリスは目を瞬いた。

「部屋に閉じこもっているだけなら、どこにいたって同じでしょう? それならうちのほうが断然いいわよ。人目を気にせず羽を伸ばせるわ」

「でも迷惑になるんじゃない……」

「いいえ、ちつとも。うちはわたしと夫の二人きりだし。使用人たちも信用できるわ。ね、そうしましょう?」

……確かに、このままここにいっても気が滅入る一方で、なに一つ状況が変わることはないだろう。

それに、変わらないマリーベルの明るさにふれて、落ち込んだ気持ちも軽くなったのも事実だ。

アイリスは少し考え、従姉妹の申し出を受けることを決意した。

善は急げとばかりに、マリーベルから父への取り次ぎを頼まれて、アイリスは久々に自室を出て父のいる書斎へ向かう。

会うことは了承してくれた父だが、二人が入室しても手元の新聞から顔を上げようとはしなかった。

見るからにこちらを拒絶した態度に、アイリスは言葉が出てこなくなる。そんな彼女の気持ちを察してか、マリーベルからアイリスを家に引き取りたいと申し出てくれた。

「今はなにかと外が騒がしいことですし、しばらくアイリスをわたしの屋敷で預らせてもらえませんか」

(お父様は許してくれるのかしら……)

アイリスはマリーベルの横でうつむき、じつと身を硬くする。

「好きにするがいい」

すると、すぐに父は素っ気なく頷いた。

アイリスは、喜びにぱっと顔を上げる。だが続く父の言葉によって、その喜びは一瞬にして碎け

散った。

「いっそのこと、そのまま修道院にでも入ってしまえ。アイリス、おまえはもはやこの侯爵家の汚点でしかない。親戚の家に置くことすら厭わしい」

「……………」

思っていた以上に冷たい言葉を浴びせかけられて、アイリスは凍りついたように動けなくなった。

(修道院……)

それはつまり、家も家族も、社会的な地位もすべてを捨てると言われているも同然のことだ。事実上の勘当宣言と言ってもおかしくない。

(婚約を破棄され悪評にまみれたわたしは、お父様にとつてもう娘でもなんでもないと……?)

あまりに無情な言葉に、目の前が真っ暗に閉ざされていく。

言葉もなく立ち尽くすアイリスの隣で、同じように呆然としていたマリーベルだが、一足先に我に返って猛然と口を開いた。

「伯父様、いくらなんでもあんまりなお言葉ですわ……！」

だが父は不機嫌そうに眉をひそめただけでなにも言わない。アイリスはそっとマリーベルのドレスの袖を引っ張った。

「アイリス……！」

「マリー、いいの」

自分のためにマリーベルまで父の怒りを買ってはいけない。アイリスはちらりと父に視線を向



けた。

父は新聞に目を落としたまま、話は終わったといった様子で二人を見ることすらない。アイリスは震える唇を噛みしめた。

（わたしの居場所は、もうこの家のどこにもないんだわ……）

父の冷たい言葉が頭の中でこだまする。

こんなにも自分が父から疎まれ、いらぬ存在になっていったという事実が心で凍りついていく。

「……失礼します」

震える声で挨拶するアイリスの隣で、唇を引き結んでマリーベルも一礼する。

書齋を出るまでなんとか気丈に振る舞っていたアイリスだったが、扉が閉まった瞬間、ふらりと身体をよろけさせた。

「アイリス！」

言葉もなく震える身体を、マリーベルがしっかりと支えてくれる。

「……大丈夫よ、あなたにはわたしがいるわ……！」

マリーベルの言葉に、アイリスは溢れ出しそうになっていた嗚咽を、なんとか呑み込むことができた。それでも震えは収まらず、マリーベルの腕にすがりついていたのろろと歩を進める。

やつとのことでアイリスの自室に戻ると、マリーベルはすぐにメイドへ荷造りを指示した。

そして当座の着替えと愛用の品をまとめさせているあいだに、アイリスをメイドが着ているような簡素なドレスに着替えさせる。

家の周りには今日も記者や野次馬が押しかけているらしく、彼らをやり過すために必要な変装らしい。

言われるまま着替えたアイリスは、うつむきながらマリーベルのあとに続く。

おかげで裏口につけられた馬車に乗るまで、アイリスの正体に気づかれることはなかった。

「すぐに出してちょうだい」

馬車に乗り込むや否や、マリーベルはすぐさま御者に命じる。

馬がゆっくりと走り出すと、様子見にやってきた野次馬たちが慌ててうしろに下がり道を空けた。

人だかりを抜けたところで、アイリスは目深に被っていたヘッドキャップを上げ、外に目を向ける。

車窓を流れる景色を見るともなく見つめながら、彼女はこれまでの人生をぼんやり振り返った。

（フィリップ殿下に婚約破棄され、父に見捨てられ……。わたしのこれまでの人生はなんだったのかしら……）

生まれてから今日までの十八年間、アイリスの人生は王子妃になるためだけにあつたと言っても過言ではない。

子供の頃から外出は制限され、付き合う友人も両親が決めた人物のみ。

年頃になった娘たちが社交界デビューに向けて盛り上がる中、アイリスは教師の数を増やされ、誰よりも完璧な淑女であるよう求められた。

勉強と習い事に明け暮れた日々……なにかを楽しむ余裕など一切なかった。

離れていく侯爵家を見つめながら、虚しさのあまりドツと疲れが溢れてくる。

そのとき、マリーベルがそっと声をかけてきた。

「あなたはもっと怒っていいし、泣いてもいいのよ、アイリス」

「え……？」

マリーベルのほうこそ泣きそうな顔をしながら、アイリスの手をしっかりと握ってくる。

「あなたが幼い頃から頑張ってきたことを、わたしはよく知ってるわ。いっぱい我慢して、周囲の期待に添えてきたことも。それなのに、こんなふうに家を追い出されるなんてあんまりよ。一番の被害者であるあなたは、もっと怒っていいの」

「……マリー……」

「この馬車にはわたしとあなたしかいないわ。大声を上げて伯父様をなじったって、泣きわめいたって、車輪の音が全部掻き消してくれるわよ」

「……っ」

ちよつとおどけた様子で片目をつむられて、アイリスは笑おうとした。

だが……できなかつた。それまできつく結んでいた口を開いた途端、目の奥が熱くなって、唇が大きく震える。

「マリー、わたしのこれまででって、いったいなんだったの……、こんな……っ」

「うん、つらかつたわね、アイリス」

優しく肩を撫でられた瞬間、アイリスは顔をくしゃくしゃにして泣き出した。大粒の涙がぼろぼ

ろこぼれて止まらなくなる。

突然、婚約破棄されたショックや、父に見放された悲しみ。すべてを失った絶望に、アイリスは声を上げて泣き続けた。

ずっとこらえていた涙は、一度流れ出すととめどなく溢れ出てきて、アイリスはマリーベルにすがりつき悲しむ心のまま嗚咽した。

——マリーベルが住まうエデューサー伯爵の屋敷は、一等地より少し外れたところにあった。

郊外だけに庭は広々としていて、街の喧騒は届かない。ゆつくりと心の傷を癒すにはもってこいという場所だった。何度か泊まったことがある客間が居室として用意され、顔見知りのメイドが側仕えについでくれる。

マリーベルを始め、その夫である伯爵や使用人たちも、温かくアイリスを迎えてくれた。

そうしてアイリスは、野次馬や記者の目がない屋敷で、優しいひとたちに囲まれて終日ぼんやり過ごしていた。心にぽっかり穴が空いたようで、なにをする気力も起きない。もしかしたら涙とともに、いろんなものが流れ出してしまったのかもしれないと思った。

それでいて、夜は寝台に入ってもなかなか寝つけず、ようやく眠っても、父の無情な言葉が耳によみがえって飛び起きてしまうのだ。

空腹も感じず、食事もほとんど食べられなくなった。

どんどん痩せていくアイリスを心配し、マリーベルがあれこれと世話を焼いてくれる。心配をか

けたくないのに、アイリス自身、自分がどうなってしまったのかわからない状態だった。そして、伯爵家に滞在して一週間。

その日もアイリスが自室となった居間からぼうっと庭を眺めていると、マリーベルが大量の雑誌を持ってやってきた。

「アイリス、今日はいいものを持ってきたのよ。これを見れば、あなたもきっと元気が出てくると思うわ！」

目の前にドンツと積まれた雑誌の山を見て、アイリスの目が丸くなる。

「なあに、これ……？」

「ファッション雑誌よ！ ルピオンから半年分取り寄せたの」

そう言うてにっこりと笑うマリーベルに、アイリスは改めて目の前の雑誌の山を見やる。

いくら地続きとは言え、これだけの雑誌を隣国から取り寄せるのは大変だっただろうに……

「あなた、昔からこういうのを見るのが好きだったじゃない？ いい気晴らしになるかと思って」

「覚えていたの……？」

微笑んで頷く従姉妹を、アイリスは驚いて見上げる。

物心ついた頃から、王子妃にふさわしくなるため淑女教育に明け暮れてきたアイリスだが、その中で唯一楽しみにしていたのが針仕事だった。

淑女の嗜み<sup>たしな</sup>には、刺繍<sup>ししゅう</sup>を始めレース編みや編み物も入っている。針仕事全般を覚えてくれた家庭教師は裁縫が得意で、授業の合間に色々な話をしてくれた。

彼女はアイリスに、服飾の最先端に行く隣国ルピオンのカタログや雑誌も持ってきてくれた。それを寝る前に読むのが、アイリスのなによりの楽しみだったのである。

いつだったか、マリーベルにもこっそりそのことを話したことがあった。まさか、それを覚えていてくれたなんて……

「ほら見て！ あなたが好きそうなドレスがたくさん載っているわよ。こういうドレスを着てみたいって、前に話してくれたじゃない」

最新の雑誌を開いたマリーベルが、アイリスの隣に座ってページを見せてくれる。そこに載っていたのは、スカートをベル状に広げたシンプルな形のドレスだった。

コルセットで腰を締め、バスルを使ってスカートをうしろに大きく膨らませるのが主流のこの国のドレスに比べ、ルピオンの装い<sup>まも</sup>は驚くほど簡素だ。

だがシンプルな形ながら、スカートを裾だけ広げたり、袖に膨らみを持たせたりして、アクセントをつけているように見える。

「向こうのドレスはなんだか簡素なデザインね。華がないって言うか……」

横からのぞき込むマリーベルが首を傾げる。彼女の言葉にアイリスは首を横に振った。

「でもアクセサリーは面白いわ。それにこのヘッドドレスも、とても可愛い……」

髪飾りを指さしながら、アイリスの口から自然と言葉が出てくる。

「せっかくだし、気に入ったものを真似して作ってみたら？」

「真似して、作る……？」

思ってもみなかった提案にぼかんとするアイリスに、マリーベルは「手始めに、これなんかいいんじゃない？」と、先程アイリスが目を留めたヘッドドレスを指さしてくる。

（確かに、これなら見よう見まねでも、なんとか形にできそうだけ……）

興味を示したアイリスを見てとり、マリーベルはあつという間にたくさん布や、侯爵家でアイリスが使っていた裁縫道具を部屋に運んでこさせた。どうやら雑誌と一緒に用意していたらしい。「ここは侯爵家じゃないし、あなたはもう王子の婚約者じゃないわ。好きな雑誌を堂々と開いていても、針仕事を朝から晩までやっても、誰も怒ったりしない。時間はいくらでもあるんだし、思いつき好きなことをしてみたらいいんじゃない？」

そう言っ、マリーベルは笑顔でアイリスの部屋を出て行った。

残されたアイリスは、ぼんやりとマリーベルに言われたことを考える。彼女の言う通り、今のアイリスには時間がたつぷりあつた。

今も変わらず心にぼつかりと穴が空いているけれど、その心にマリーベルの言葉が消えずに残る。

「思い切り、好きなことを……か」

せつかく見本となる雑誌もあるのだし、と、アイリスは徐々に自分の裁縫道具に手を伸ばした。

雑誌のヘッドドレスを参考にして、手持ちのレースの中から使えそうなものを吟味していく。侯爵家にいた頃、馴染みの仕立屋から買ったビーズや糸もテーブルの上に引つ張り出す。

始めてみると、自分でも驚くほど夢中になっていた。材料を選んだり、布にビーズを縫い留め、レースを巻きつけたりするうちに、なにも感じなくなっていた心の奥から、ふつふつと喜びが沸き上がってくる。

針仕事をするとき必ず感じていた、楽しいという気持ちが――

作業の途中、メイドたちが様子を見にきたり、お茶やお菓子を置いていってくれたりしたが、アイリスは夢中で手を動かし続けた。

おかげでヘッドドレスが完成したときには、もう日が暮れかけていた。

「明かりを置いていってくれたのにも気づかなかつたわ……」

傍らの小机たわにいつの間にかランプが置かれていることに気づいて、アイリスは驚きのあまりパチと目を瞬またたいてしまった。

ちようどそのとき扉が小さくノックされて、側付きのメイドが顔を出す。

「失礼いたします、アイリス様。そろそろお夕食の時間になります、いかがいたしましたしょう？」

「え、もうそんな時間なの？」

午前中から作業を始めたのだから、昼食も食べずにひたすら没頭していたようだ。

「わたししたら、ごめんなさい……！」

きつとメイドたちは自分に食事のことを聞いてきたはず。けれどアイリスはそれに返事をした記憶がない。もし適当な返事をして、用意してもらった食事を無駄にしていたら、申し訳ないことをしてしまった。

しかし、メイドは嬉しそうに首を横に振る。

「いいえ、集中しておいででしたので、お声をかけずにおりました。こちらにいらしてからのお嬢様はあまり元気がないご様子でしたので、楽しそうに作業される姿を嬉しく思っておりました」  
なんにも言われないながらも心配されていたと知り、アイリスは嬉しくも恥ずかしくなる。

「ありがとうございます。おかげで完成したわ。これなんだけど……」

赤面しつつ、手元のヘッドドレスを掲げてみせた。

「まあ、なんて可愛らしいのでしょうか……！ とてもお上手ですわ、お嬢様」

アイリスの手からヘッドドレスを受け取ったメイドは、いろんな角度からそれを眺めている。彼女の興奮した様子を見たアイリスも、嬉しさに頬を緩めた。

「そう言ってもらえて嬉しいわ。わたしもこんなに楽しかったのは久しぶりで——」

はにかみながら話し始めたそのとき、アイリスのお腹が、くう、と小さく鳴る。

誤魔化しきれないその音に、アイリスは無言で赤くなり、メイドは目をまん丸にした。

「……どうやら、身体が栄養を求めているようですわ、お嬢様」

「……そ、そうみたい。補充しないとイケないわ。できれば、たくさん……」

神妙な顔で口を開いたメイドに、アイリスもまた同じような表情でこくりと頷く。そして、二人は同時にぶつと嘔き出した。

空腹でお腹が鳴るなんて初めての経験だ。この頃は空腹を感じることも自體なかったのに。

マリーベルの言ったように、思いつ切り好きなことをした効果は絶大だったらしい。

そんなことを考えながら、アイリスはその日久々に、出された食事を完食したのだった。

それ以降、アイリスは日中は針を動かして過ごすようになった。

先日のヘッドドレスに続き、コサージュや帽子飾りをどんどん作っていく。

そして世話になっているメイドたちには、名前の頭文字を刺繍したハンカチーフを送った。

「まあ、なんて素敵なお刺繍でしょう……！ お嬢様、本当にいただいてよろしいのですか？」

お茶の支度のためにやってきたメイドの一人にハンカチーフを手渡すと、ひどく恐縮しながらも刺繍の文字を大切そうに撫でている。そんな彼女に、アイリスはにっこり笑って頷いた。

「もちろんよ。どうか受け取って」

「ありがとうございます……！」

メイドは、嬉しそうにハンカチーフを受け取ってくれた。

自分の作ったものを手にした彼女たちが笑顔を見せてくれると、空っぽになった心が満たされていく感じがして、アイリスもまた嬉しくなる。

針仕事をする専用のスペースを自室に作って、アイリスは毎日楽しく針仕事に励んでいた。

そんな折、マリーベルがひよっこ部屋を訪ねてきた。

「うわ、ずいぶん本格的な作業場ができたわね」

あらかじめ許可を取っていたが、実際に文机の上に散らばる生地や糸を見て、さすがのマリーベルも驚いたらしい。



アイリスは作っていたリボン飾りを置いて、マリールベルのために椅子を持ってきた。

「散らかってごめんさい。おかげさまで、毎日がとても楽しいわ」

「それはいいことね。ここへきたときより顔色もよくなったし、メイドたちにもあなたのハンカチーフは好評みたいよ」

「ふふ、ありがとう。ところでマリール、なにを持っているの？」

「よくぞ聞いてくれました」

マリールベルはこの部屋へ入ったときから小脇に抱えていた小箱を、アイリスの前で開いた。

「お気に入りの帽子なんだけど、ここが少し汚れてきちゃったのよ。上手いこと隠せないかしらと思つて」

小箱に入っていたのは手のひらサイズの小さな帽子だ。アイリスも、マリールベルがこれを身につけているのを何度か見たことがある。

「ああ、このリボンのところね。確かにちよつと汚れているわね」

「気づかないうちに煤がついちゃったみたいなの。どうにかならないかしら？」

アイリスは少し考えて、リボンと似た色のレースを道具箱から引つ張り出す。それを使って手早く小さなコサージュを作り、汚れているリボンの上に縫い留めた。続けて同じようなコサージュを何個か作つて、形を整えながら周囲に縫い留めていく。

ものの一時間もしないうちに、薔薇のコサージュがたくさんついた可愛らしい帽子ができあがる。

メイドが運んできたお茶を手に、アイリスの作業を見守っていたマリールベルは、完成品を手に

取つてあんぐりと口を開けた。

「どうかしら？ 気に入らないようなら、すぐに直すから遠慮なく言つて」

「まあ、アイリス、気に入らないなんてことあるわけないわ。あなたつて天才よ！ こんなふうにしてもらえるなんて思つてもみなかったわ！」

マリールベルはさつそく帽子を被り、手鏡をのぞき込んで歓声を上げる。

彼女が心から喜んでくれているのがわかり、アイリスも嬉しくなった。

(自分が作つたもので誰かに喜んでもらえるのつて、すごく嬉しいことなのね)

ハンカチーフを手にしたときのメイドたちの笑顔も思い出し、アイリスはしみじみと思った。

また、そう感じられるようになったことで、周囲への感謝の気持ちも湧いてくる。

自分のためにいつも誰かが心を砕いていてくれるのだと思うと、ぼんやりと過ぎ去るだけだった日々がとても温かく優しいものに感じられた。アイリスはマリールベルたちのおかげで、傷ついた心をゆつくりと癒していったのだつた。

——侯爵家を出てから二十日ほど経つたある日。

マリールベルとその夫である伯爵は夜会に出かけていたので、夕食は一人だった。

賑やかに会話をする相手がいないと、あつという間に食事が終わつてしまい、いつもより早い時間に寝支度が整ってしまった。

気を利かせたメイドが、お茶を淹れましょうかと言ってくれる。アイリスはお礼を言つて、安眠に効くというハーブティーを淹れてもらうことにした。

(静かな夜だわ……)

窓辺の揺り椅子に座って、アイリスは窓越しに夜空を見上げる。薄い雲で月が隠れてしまっているが、静かでない夜だった。

そろそろ本格的な社交期に入り、あちこちの屋敷で夜会や舞踏会が開かれるようになる。

マリーベルは社交好きだから、この屋敷でも舞踏会を開くはずだ。広い庭を活用したお茶会や、音楽会も。アイリスも去年まではそれらに招待されていた。けれど……

(今年、わたしが人前に出ることはできないわね……)

たとえ侯爵家を出されなかったとしても、フィリップ王子に婚約破棄されたアイリスが、人目のある場所に出て行くことは難しい。

マリーベルはなにも言わないけれど、きつとアイリスのことを根掘り葉掘り聞かれているはずだ。従姉妹である二人が姉妹同然に仲良くしていたことは、社交界でもよく知られている。

(ここはとて居心地がいいけれど……だからといって、いつまでもお世話になっているわけにはいかないわよね)

今はここにアイリスがいることは知られていないが、ひとの出入りが多くなれば気づく者も出てくるだろう。悪評にまみれた自分がいることで、マリーベルに迷惑がかかることだけは避けたい。

かといって、今の自分が他に頼れる場所など、すぐには思いつかなかった。

王子の婚約者ではなくなり、侯爵家を出され事実上の勘当を言い渡された自分は、身分もなにも持たないただの十八歳の娘でしかない。

もはや当たり前前の結婚も望めない自分の行く末は、父の言うように修道院しかないのだろうか……

(いったいこの先、どうすればいいのかしら……)

考えれば考えるほど落ち込んできたアイリスは、ハーブティーを無理やり喉に流し込んで寝台へ向かった。

\* \* \*

それから三日ほど経った日のこと。

アイリスが自室で刺繍を刺していると、廊下からドタドタと走ってくる音が聞こえて、バンツと扉が勢いよく開いた。

「ねえ、アイリス！ 舞踏会に行ってみない？」

息せき切って飛び込んできたのはマリーベルだ。

「舞踏会!？」

アイリスの口から、ひっくり返ったような声が出る。

「いきなりなにを言い出すの、マリーベル。今のわたしは、人前に出て行ける状況じゃ……」

「もちろん、わかっているわ。だからね、行くのは仮面舞踏会よ！」

「仮面舞踏会？」

アイリスは思わず従姉妹に聞き返してしまった。

仮面舞踏会というものの存在は知っていたが、参加したことはなかった。厳格な父が『仮面で顔を隠すような集まりなど、いかがわしい!』と言っていたからだ。

アイリスも王子の婚約者という立場から、そうした集まりには参加しないようにしていた。「仮面舞踏会と一口に言っても、色々あるのよ。今回の仮面舞踏会は、身元のしっかりしたひとしか参加できない集まりだから安心して」

「……でも、見るひとが見れば、わたしだつてわかつてしまうんじゃない?」

だがマリーベルは『その質問を待っていた!』とばかりに、ぐっとアイリスのほうへ身を乗り出してきた。

「今回の仮面舞踏会はね、ただ仮面をつけるだけじゃなく、参加者が思い思いの格好で楽しむことができるのよ!」

「思い思いの格好?」

首を傾げるアイリスに、マリーベルは両腕を広げて滔々と語った。

「例えば、女性はドレスを着なくてもいいの。男装したり、何百年も前に流行ったような襟の分厚い古風なドレスを着てもいいのよ。わたしの友達なんか、道化師の格好をして、その場でジャグリングをしたんだから! 髪を染めたり、カツラを被ったりするひともあるから、絶対にばれたりしないわ」

「ど、道化師の格好……」

確かに、お祭りの街角で芸を見せる赤鼻の道化を、誰も貴族のご婦人とは思わないだろう。

アイリスは、大昔のドレスを着てしゃなりしゃなりと歩く貴婦人や、付け髭やカツラをつけて闊歩する紳士たち、ひょうきんな仕草の道化師を思い浮かべる。その瞬間、思わず笑みがこぼれた。

「ね、流行りのファッション雑誌もいけど、普段見られない装いを直に見物するのも楽しいと思わない? きつといい気晴らしにもなると思うわ」

ぐっと拳を握って力説する従姉妹の姿に、アイリスの心が揺れる。

自分に関する悪い噂のことを思うと、人前に出ていくのはかなり勇気がいる。けれど家の中で鬱々と今後について考え込んでいるより、もしかしたらいい案が浮かぶかもしれない。

(そうよ、誰とも喋らず、壁の花になっていれば、きつと誰も自分に気づいたりしないわ……)

それに……マリーベルの言う、様々な格好をしたひとで溢れる舞踏会を見てみたいという気持ちもあった。

そう結論づけたアイリスは、こちらを窺うマリーベルの手を取りにつこり微笑んだ。

「ありがとう、マリーベル。とても楽しそうだわ。是非わたしも一緒にさせて」

仮面舞踏会に参加すると決めたら、急ぎ必要になるのは当日の衣装だ。

「せっかくだから……このヘッドドレスをつけていこうと思うの。なかなか身につける機会がなかったから」

そう言っただけでアイリスが取り出したのは、マリーベルがファッション雑誌を持ち込んだ日に作った

ヘッドドレスだ。レースを寄せて花びらの形を作り、ビーズをたくさん縫い留めた華やかなものだ。笑顔で頷いたマリールは、さっそく「それに似合う装いは……」と知恵を絞ってくれる。

「そうねえ、例えば、そのヘッドドレスを花冠に見立てて……こう、なにか妖精っぽい格好にしてみるっていうのはどう？」

「ああ、おとぎ話に出てくる妖精姫みたいな？ 確かあの妖精姫は、シュミーズドレスを着ていたかしら？ それだったら、ヘッドドレスにもう少しコサージュを足して、豪華にしたほうがいいわね」

「せっかくだから髪もそれらしくしましょうよ。緩めに巻いて、結わずに垂らしておくの。——あ！ いいことを思いついた。アイリスが妖精姫なら、わたしは悪者の魔女の格好にするわ！」

アイリス以上に楽しそうな様子で、マリールがはしゃいだ声を上げる。そんな従姉妹を見てみると、アイリスの胸にも仮面舞踏会を待ち遠しく思う気持ちが湧き上がってきた。

（他の参加者も、いつもと違う格好をして、まったく違う自分になって参加するのだから、きっとわたしのことも気づかれたりしないわよね）

そうしてアイリスは、マリールとその日を指折り数えて待ちながら、当日ギリギリまで妖精姫のドレス制作に明け暮れたのだった。

## 第二章 仮面舞踏会での出逢い

マリールの友人が主催者だという仮面舞踏会は、かなり盛況のようだった。馬車寄場に入った時点で多くの馬車と招待客が見えて、それなりの規模だということに驚く。

ようやく馬車を停めることができたので、アイリスは蔓草模様が入った仮面を身につけ、マリールと連れだって馬車を降りた。

「ずいぶんたくさんひとが招待されているのね」

「ここのご主人が派手好きだからね。もちろん、その奥方であるわたしの友人も。夫婦で趣味が合った結果の催しって感じね」

会場となる広間へ歩きながら、アイリスはそつと前後を歩く人々に目を走らせる。もしかしたら誰かがアイリスに気づいて声をかけてくるのではないかと不安がよぎった。

そんな従姉妹に気づいたのだろう。マリールが「大丈夫よ」と耳元で囁いてくれる。

「今日のあなたはとっても可愛い妖精姫よ。誰も気づきやしないわ。むしろ、そうやって猫背でこそそしているほうが人目を引いちゃうわよ。もつと胸を張って堂々としていなさいな」

そう言われても……という心境だが、マリールの言うことはきつと正しい。アイリスはうつむきそうになるのをこらえて、ぐつと顎を上げた。

緊張しながら受付を済ませ、外套を預けて広々とした会場に入った瞬間——  
アイリスは思わず息を吞んで、入り口に立ち尽くしてしまった。

「これは……、なんて、すごい……！」

舞踏会は大盛況だった。高い天井とガラス張りの壁が覆う広間には、すでに五十人以上の人々が詰めかけ、仮面と思いの衣装で楽しんでた。

シャンデリアがこれでもかと光り輝く中、皆が談笑したり踊ったり、酒と料理に舌鼓を打つたりと、この場を満喫している様子だ。

「見て、マリーベル。大昔の騎士の鎧姿をしている方がいるわ！ あの鎧、素材はなにかしら……まさか本物というわけではないわよね？」

ガシャンガシャンと音を立てながら横を通り過ぎていく騎士を見て、アイリスは目を輝かせる。思わず従姉妹の袖を引っ張ると、マリーベルは苦笑して肩をすくめた。

「そんなの、わたしに聞かれてもわからないわよ。鎧の専門家じゃないんだから」

「あ、ねえ、向こうには男装した女性がいるわ。あの格好は乗馬服かしら。でもフリルをたくさん使つてとても素敵……！」

「ね？ いろんな装いが見られるつて言った通りでしょ？」

マリーベルの言葉に、アイリスは大きく頷いた。

本当にいろんな格好のひとがいた。何十年も前に流行した、ゴテゴテとしたドレスを着ている貴婦人もいれば、巻き毛のカツラをつけて、ヒールの高いブーツを履いた紳士もいる。

しかもよく見てみれば、完全に当時のままの格好というわけではない。最近になって考案されたレースを上手く取り入れたりして、それぞれが趣向を凝らした装いをしている。

見れば見るほど楽しくなって、アイリスは夢中で周囲を見回した。

同じように周囲に目を走らせたマリーベルは、ほっとした様子で息を吐く。

「よかった。誰もあなたとは気づいていないみたいね。まあここまで妙な格好の人間だらけだと、現実のことなんてどうでもよくなるのかも。それが仮面舞踏会のいいところよね」

「ええ、そうね。……あ、マリー、あそこで手招きしている方がいるけど、知り合いかしら」

「ああ、そうだわ。この家の奥方よ。今日は修道女の格好をすつていたから間違いないわ。挨拶しなきゃ。あなたも一緒にくる？」

「……いいえ、遠慮しておくわ。なにがきっかけでわたしと知られるかわからないし……。なにか聞かれたら、田舎から出てきた遠縁の娘とでも言っておいてくれる？」

「……そうね。そのほうがいいかも。じゃあ挨拶に行つてくるけど、一人で大丈夫？」

「ええ、壁際で大人しくしているわ」

気遣わしげなマリーベルに微笑んで、アイリスは壁際に置かれた長椅子へ向かう。

舞踏会が始まったばかりということもあって、休憩用に置かれている長椅子に座っている者は皆無だ。おかげで広間全体を見渡せるいい位置に座ることができた。

みんな社交に忙しいのか、壁の花になっているアイリスなど目もくれない。おかげでアイリスは思う存分、人々の衣装を楽しむことができた。

仮面越しの狭い視野の中、目をこらして会場を眺めていると……

「——あなたは踊らないのか？　せっかく魅力的なドレスを着ているのに」

不意に傍らから声をかけられて、アイリスは思わず息を呑んだ。

幼い頃から叩き込まれた淑女教育の甲斐あって、無様に飛び上がることはなかったが、顔を上げる動きはややぎこちなくなってしまう。

声のしたほうを見れば、どこか気怠<sup>けだる</sup>そうな笑みを浮かべた紳士が立っていた。

黒の上下にマントを羽織って山高帽を被っている。このところ世間で流行しているという小説に出てくる、怪盗の格好だろうか？

いずれにせよ、長身の彼にとてもよく似合っている。少し浅黒い色の肌が黒い仮面と相まって、エキゾチックな雰囲気<sup>かみ</sup>を醸し出していた。

（——貴族の方かしら？　知り合いではなさそうだけど）

もつとも仮面をしているから確証はないが。

アイリスは何事もなかったように長椅子へ座り直し、紳士に向かって口を開いた。

「ええ、踊るよりも、舞踏会の様子を眺めているほうが楽しいので」

「ほう、人間観察が好きということかな？」

「いいえ。ひとより衣装を見ております。皆様とても素敵な装い<sup>まね</sup>をしていらっしゃるので」

男は「なるほど」と呟きつつ、アイリスの全身に視線を走らせた。

「そういうあなたも、素敵な衣装を着ている。特に、頭を飾るそれはとても趣味がいい」

アイリスは目を瞞<sup>なま</sup>ってヘッドドレスにふれる。自分で作ったものを見ず知らずのひとに褒められて、胸の中に嬉しさが込み上げてきた。

「……ありがとうございます。これは自分で作ったものなのです」

「自分で……？」

紳士は興味を持ったのか、少しこちらへ顔を寄せてきた。

「ビーズとの合わせ方が面白いな。もしやこれとお揃いのドレスも自分で？」

再びアイリスの装い<sup>まね</sup>を頭からつま先まできつと一瞥<sup>いちめつ</sup>した紳士が、さらに身を寄せながら聞いてくる。

その距離の近さに、アイリスはなんとなく落ち着かない気持ちになった。

今日のアイリスは、妖精姫をイメージしたハイウエストのシュミーズドレスを着ている。

シュミーズドレス一枚だとあまりに薄すぎて肌が透けてしまうので、コルセットを身につけ、腰元には布を巻いた。大きく開いたデコルテには草花を模したレースを縫い付け、ドレス全体に蔓草<sup>つるくさ</sup>模様の刺繍<sup>しゅう</sup>を入れて豪華さを出している。

「ええ……そうです」

「それはすごい」

お世辞ではなく本当に感心したという声<sup>こゝろ</sup>で言われ、アイリスは目を見開いた。

貴族の世界では、貴婦人はハンカチーフやシャツの袖口に刺繍<sup>しゅう</sup>をすることはあっても、衣服や小物を作ることはほとんどない。それは仕立屋の仕事だからだ。貴族相手なら眉をひそめられても

かしくないことだけに、紳士の言葉にひどく驚かされる。

彼が貴族なら、よっぽど心の広いひとなのかもしれない。もちろん、貴族でない可能性もあるけれど……

「では、あなたはデザイナーかなにかなのかな？」

「デザイナー？」

（仕立屋のことかしら……？）

聞いたことのない言葉に首をひねったアイリスは、こちらをのぞき込む紳士へ正直に答えた。

「いいえ、違いますわ」

「……ああ、失礼した。この場で職業を聞くのは無粋ぶすいだったな。気を悪くさせたのなら謝罪しよう」

そう言っ頭を下げられて、アイリスは面食らってしまった。軽くとはいえ、立派な紳士に頭を下げさせてしまい、どうしていいかわからない。

慌てて椅子から立ち上がり、気にしないでほしいと伝えようとすると――

「あら、アイリス？ そちらの方は？」

友人への挨拶あいさつを終えたのだろう。マリーベルが戻ってきた。

怪盗の仮装あいさつをした男は、さっと身体を起こす。

「お連れの方が戻ってきたようだな。それでは、わたしはこれで失礼するとしよう」

なんとも言えない気持ちでアイリスは頷く。すると男は胸に手を当てて一礼しつつ、そっと耳元

で囁ささやいてきた。

「次はポーリーン子爵家で開かれる仮面舞踏会に参加する。今日と同じ格好で行くから、もし会えたときは――」

男は言葉の続きをあえて言わず、仮面の奥から意味ありげに微笑みかけてくる。アイリスがとっさに反応できずにいるうちに、彼はさっとマントを翻ひるがえして、人混みの中へ消えていった。

呆然とその背を見送るアイリスに気づき、マリーベルがすまなそうな目を向けてくる。

「もしかして、お邪魔してしまっただかしら？」

「あ……いいえ、いいのよ」

そう言いながらも、アイリスは男が去って行ったほうをじっと見つめる。

不思議なことだが、あんな短い会話を交わただけなのに、彼はこれまで出会った誰よりも、強い印象をアイリスに残していった。

（次はポーリーン子爵の仮面舞踏会に参加すると言っていたけれど……）

そこに行けばまた会えるのだろうか？ アイリスは、そんなふうに思った自分に驚いた。

アイリスはそっと頭に手をやる。

彼に褒められたヘッドドレスが、シャンデリアの明かりに照らされてキラキラと輝いていた。

仮面舞踏会のあと、怪盗の仮装の紳士のが胸に残る一方で、アイリスは彼が口にした『デザイナー』という言葉も気になっていた。

(たぶん、ドレスや小物の装飾を考案するひとのことだと思うけど……)

折良く、マリールが新しいドレスを作るために懇意の仕立屋を呼ぶというので、アイリスは思い切ってその場に同席させてもらうことにした。

顔を知られている可能性を考え、頬にそばすを描き、お下げ髪と縁の大きな眼鏡で変装する。その甲斐あって、やって来た仕立屋はアイリスを侍女の一人と思つたようだ。おかげで彼女たちの仕事ぶりを自由に見学することができた。

作業の邪魔にならないよう気をつけながら、彼女はドレスの図案を広げた仕立屋に、「これはあなたを描いたものなの？」と問いかける。

「いいえ。こちらはわたくしどもの専属デザイナーが手がけたデザイン画ですわ」

「専属デザイナー……。そのひとたちが、こういうものを描くの？」

「はい。これまでマリール様にご注文いただいたドレスから、好みの傾向を導き出し、そこに最先端の流行を取り入れたデザインを考案させていただいております」

仕立屋が胸を張って告げる。アイリスは何枚かの図案を手に取り、熱心に見つめた。

「こういったものは、ドレスの作り方を知らないとは描くのは難しそうですね……」

思わず呟いたアイリスに、仕立屋は当然とばかりに頷いた。

「おっしゃる通りですわ。デザイナーは、誰よりも衣服の製法に精通している者がなるのが一般的ですから」

(なるほど……。わたしはこれまで、すでにできあがっているものを参考にしていたけれど、デザ

イナーは違うのね。どういったものを作るか、一から考えるのが仕事なのだわ)

「ここが提案してくるドレスは色使いが大胆で、とても気に入っているの。きつとセンスのいい方が図案を考えてくれるのね。仕上がりが丁寧だから、お友達にもお勧めしているのよ」

採寸を終えたマリールが会話に入ってくる。仕立屋は相好を崩して頭を下げた。

「伯爵夫人にそうおっしゃっていただけなんて、感激の極みですわ。デザイナーやお針子たちも、喜びます。次のドレスはより美しいものをお渡しできるように、いつそう励みますわ」

「ええ、お願いね」

マリールの言葉に、うしろに控えていたお針子たちがどこか誇らしそうに微笑んでいた。

その表情を見て、アイリスの脳裏に自分の作った小物を受け取ってくれたメイドたちの笑顔がよみがえる。直した帽子を受け取ったときのマリールの顔も。

(わたしも、こんなふうになにかを作って、誰かに喜んでもらえる生き方がしたい……)

ふと、そんな考えが頭に浮かぶ。と同時に、この先どうしようかと考え続けていた胸に、希望の光がぼつと灯った気がした。

アイリスはその気持ちのまま、思い切って、デザイナーとはどういう仕事か、どうやったらなれるかと仕立屋に質問する。

アイリスの勢いに驚きながらも、仕立屋は丁寧なその質問に答えてくれた。

曰く、デザイナーのほとんどが、幼い頃から仕立屋で修業を積んでいる者なのだという。お針子としてある程度の腕を認められてから、デザイナーのもとで勉強するのだそうだ。



つまり、幼い頃からその世界に入って学ぶしかデザイナーになる方法はないらしい。それを聞いたアイリスは、がっかりする気持ちを抑えられなかった。希望の光が見えたと思つた矢先に、躓いてしまった感じが否めない。

「はあ……と、大きなため息をついたところで、マリールベルに声をかけられた。

「そういえば、この前の仮面舞踏会、あなたずいぶん楽しんでいましたでしょうか？ 今度はポーリーン子爵のところと同じような催しがあるのだけど、行く？」

「ポーリーン子爵の仮面舞踏会……」

その言葉で、真つ先にアイリスの頭に浮かんだのは、あの怪盗の仮装をした紳士のことだ。

彼は別れ際、次はポーリーン子爵の舞踏会に参加すると言つた。

気づくとアイリスは、前のめりになってマリールベルの手を握っていた。

「是非行きたいわ、マリールベル……！」

「あらまあ、よっぽど気に入つたのね」

そう言いながら、マリールベルは嬉しそうに破顔した。

「本当にあなたはドレスを見るのが好きね。仕立屋にも色々質問してたし……。まあなんにせよ、元気が出てきたならよかつたわ！ やっぱり好きなものに囲まれるって大切よね」

うんうんと頷いているマリールベルを見つ、アイリスはめまぐるしく頭を動かしていた。

もしかしたら、あの紳士は服飾やデザイナーについて詳しいのかもしれない。

貴族にとつて、身につけているものを褒めるのは挨拶みたいなものだ。だけど、彼はもつと専門

的な視点からアイリスのヘッドドレスを見ていた気がする。

（彼ならデザイナーのなり方について、なにか別の方法を知っているかもしれない……！）

「アイリス？ なにぼうつとしてるの」

マリールベルに声をかけられ、アイリスはハッと顔を上げる。いつの間にか仕立屋たちは帰り支度を終え、部屋を出て行くところだった。

マリールベルと並んで仕立屋を見送りながら、アイリスは密かに胸を高鳴らせる。もしかしたら自分は今、これから進むべき道について考えるきっかけを得られているのかもしれない。

（あの紳士にまた会つて詳しい話を聞ければ、自分のやりたいことがはっきり形になるかもしれないわ……！）

期待に胸を膨らませながら、アイリスは当日に向け「よし」と密かに気合を入れた。

そして、仮面舞踏会当日――

中世風の薄桃色のドレスを着て階段を下りてきたアイリスを、先に玄関で待っていたマリールベルが目丸くして迎えた。

今日のアイリスの装いは、形こそ中世風のドレスながら装飾は凝った現代風という、変わっているがとても可愛らしいドレスだった。

ストーンと自然な形に裾の広がるアイリスのスカートをまじまじと見て、マリールベルが尋ねてくる。「アイリス、あなたのセンスって独特ね。バツルのないドレスなんて、腰がスースーして落ち着かなくない？」

アイリスは髪飾りを整えつつ、ちょっと唇を尖らせた。「そう言うけど、お隣のルピオンではバツルのないドレスが主流なのよ？ それにこのスカートは、とても動きやすく楽なんだから」

実際、バツルがないだけで驚くほど動きやすい。特に馬車の乗り降りの際など、感動して思わず笑ってしまったくらいだ。

タラップを上るのも座席に座るのも、いちいち姿勢を気にする必要がないのだ。スカートの膨らみを崩さないよう浅く座る必要もないから、馬車の揺れでバランスを崩すこともない。

(そう考えると、この国は装いでも女性の行動を制限しているみたいね……)

侯爵令嬢として、王子の婚約者として、常に厳しく行動を制限されてきたアイリスだからこそ、そんなふうを感じるのかもしれないが。

ほどなく会場となるポーリー子爵家の屋敷に到着し、二人は先日と同じように連れ立って受付を済ませた。

先日の舞踏会に比べるとやや規模が小さいが、照明をあえて暗くして、妖しげな雰囲気を出している。

会場にも黒っぽい格好をしているひとが多いようだった。その中にいると、薄桃色のアイリスのドレスは少し目立つかもしれない。

だが今日に限ってはそのほうが都合がよかった。主催者に挨拶してくると言うマリーベルと別れ、アイリスはゆっくりと人混みの中を歩き始める。

装いは新しくしたけれど、仮面は前と同じものだ。そうすれば、相手もきっとアイリスに気づきやすい。

アイリスは、さりげなく人混みに目を走らせた。ほどなく、マントを翻してこちらへ歩いてくる人影に気づく。

アイリスは立ち止まって、彼が近づいてくるのをじっと見つめた。ほどよい距離で彼が足を止めたのを合図に、ドレスの裾をつまんでお辞儀をする。

「こんにちは。またお目にかかれて嬉しいですよ」

「こちらこそ——今日は中世風のドレスなのだな。……いや、ルピオン風のドレスと言ったほうがいいか？」

彼がスカートの形を見ながらそう言ったので、アイリスは目を瞠った。

日常的にドレスを身につけている女性ならまだしも、男性がスカートの形を見ただけで、ルピオン風のドレスと言いついて驚いた。

やはり彼は服飾に詳しいのかもしれない……

アイリスは期待に胸を膨らませつつ、慎重に問いかけた。

「あなたは、ルピオンの流行をご存じでいらっしゃるのですか？」

「ああ。仕事でルピオンに向くことが多くてね」

「お仕事で……」

どんな仕事なのだろう？ 貴族であれば、外交関係と思うところだけでも。